

## 6月4日 聖霊降臨の主日

使 2:1~11 ガラ 5:16~25 ヨハ 15:26-27, 16:12-15

### 1. ヨハ

v.26-27 「わたしが父のもとからあなたがたに遣わそうとしている弁護者、すなわち、父のもとから出る真理の霊が来るとき、その方がわたしについて証しをなさるはずである。あなたがたも、初めからわたしと一緒にいたのだから、証しをするのである。」

使徒たちをキリストの福音の証人としてお立てになった方は、彼らにその証言を有効にする聖霊を送って、自ら共に働いておられます。この聖霊の働きなしには、使徒たちといえどもただの無学で意志薄弱な凡人でしかありませんでした。使徒たちの証言は、昇天のキリストが父のもとから遣わされる聖霊が共に働いてくださることによって、神のことは、贖いの福音として、現代の私たちにも語りかけているのです。

いつの時代にも、聖伝と聖書は、私たちがこの使徒たちの証言をそこから聞く源泉であります。先般のオリンピックで、荒川選手のイナバウアーが全世界にテレビ中継されたとき、その翌日になって、日本中の接骨院に多数の“ぎっくり腰”の患者が訪れたという話をラジオで聴きました。テレビを見て、自分にも出来ると錯覚した無邪気なスケーターたちについての話題なのですが、これが聖伝と聖書の話になると、笑い話ではすまされないこととなります。

聖書を読むことによって、読者が自分も使徒と同じになれると錯覚したり、自分も小さなキリストになれると勘違いすることがあって、そのような誤解が多くの人々を知らず知らずの中に“使徒たちの証言に耳を傾ける”ことから遠ざけて来ました。キリストもただの人、使徒たちもただの人間と考えることによって、自分も一人の人間として彼らと対等に論じ合えるという気持ちで、私たちが思い上がりで傲慢に陥れたケースが多々あったのではないのでしょうか。

キリストは神の身分でありながら、私たちが罪から贖うために“ただの人”になられました。使徒たちも“ただの人間”(使 10:26)でありましたが、主の昇天の後に聖霊を受けて、神に選ばれた(使 10:41)キリストの証人となりました。この使徒たちによるキリスト証言こそが、唯一の啓示の源泉であることを、第二バチカン公会議は「神の啓示に関する教義憲章」で宣言しました。聖霊は今日も使徒たちの証言と共に働いて、現代の私たちにキリストの福音を証ししてくださいます。

### 2. 使

v.6 「だれもかれも、自分の故郷の言葉で使徒たちが(神の偉大な業を語っているのを)聞いて ……」

聖霊降臨の主日は、昇天のキリストが聖霊を遣わして、使徒たちをキリストの福音の証人とされたことを記念する祭日です。使徒言行録は、初代教会が当時のローマ世界に広がって行った記録です。その中心的な主題は“使徒たちによるキリストの福音の宣教”でありますから、現代の私たちもその宣教に耳を傾けることが大切です。そしてその宣教にはいつも聖霊が共に働いて、人々を悔い改めと罪の赦しの洗礼へと導き

ました。

注目すべきことは、使徒たちの宣教と、これを有効にする聖霊の働きとの密接な関係です。ここでも、読者が自分も聖霊を受けて使徒と同じになれると錯覚したり、自分も小さなキリストになれると勘違いすることがあってはなりません。原理主義的な傾向の人々が、そのような思い上がりと傲慢による熱狂によって、現代キリスト教の中の侮りがたい勢力となっていることは事実です。しかし福音の宣教は、人間の熱狂によってではなくて、使徒たちの証言と共に働いてくださる聖霊の御業によってだけ、人々に罪の赦しと永遠の命を与えることを理解しましょう。

聖霊降臨の主日が、復活節の最後を締めくくる祭日として典礼暦の中に置かれていることには、とても大きな意味があるのですから。

### 3. ガラ

「霊の導きに従って歩む」(v.16)という用語を、使徒たちが宣教した福音から切り離して理解することを、新約聖書は全く知りません。ところが残念なことに、これまで通俗的なキリスト教理解では、「愛、喜び、平和、… 親切、善意」(v.22)があれば“霊に従って歩んでいる”ことになり、「姦淫、わいせつ、好色、… 敵意、争い」(vv.19-20)を避けていれば“肉に従って歩んではない”ことになるという具合に説明されて来ました。しかし、聖霊は生きて働いておられる神であって、決して人間の道德規準のことではないのです。

「わたしたちは、義とされた者の希望が実現することを、“霊”により、信仰に基づいて切に待ち望んでいるのです」(ガラ5:5)という訴えに続いて、使徒パウロは今朝のこのテキストにある勧告を語ったのでした。私たちは使徒の伝える福音を受け入れるために、霊に従って歩みましょう。

「もし、イエスを死者の中から復活させた方の霊が、あなたがたの中に宿っているなら、キリストを死者の中から復活させた方は、あなたがたの中に宿っているその霊によって、あなたがたの死ぬはずの体をも(終末の復活の日に)生かしてくださるでしょう。」(ロマ8:11)

ハレルヤ、アーメン。

## 6月11日 三位一体の主日

申 4:32～40    ロマ 8:14～17    マタ 28:16～20

### 1. マタ

vv.18-20 「イエスは、近寄って来て言われた。“わたしは天と地の一切の権能を授かっている。だから、あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にきなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。”」

キリスト教は歴史的宗教であります。それは歴史上のある特定の事実、すなわち、イエスの受肉、生涯、死、復活という事実が、他のあらゆる事実よりも重要であり、人類の全歴史を解釈する鍵であるとする宗教です。教会はその信仰を、イエス・キリストの血によって贖われ、罪を赦されて、“秘められた計画”に与る民とされたという体験として理解して来ました。使徒たちの宣教が常に“父と子と聖霊の名による洗礼”と結びついていたのは、その宣教によって生み出された教会の信仰が、父・子・聖霊なる神と人格的に関わるものであったからです。

近代および現代の通俗的なキリスト教は、イエスによって、あるいはその弟子たちによって与えられた、神に関するある種の教説や思想を、単に知的に受容することが宗教の意義であるかのように、誤って教えて来ました。しかし、三位一体の教理は、古代教会が自らの信仰体験を、父・子・聖霊なる神との人格的な関わりとして理解したことによって形成されたものでした。カトリック教会は使徒継承によって、使徒たちが伝えた福音と神の国への希望を、今日に至るまで受け継いで来ました。三位一体の教理は、この福音を説明するために古代教会が用いた神学なのです。それは各時代の教会が誤った解釈や異端的な考えに陥らないで、使徒たちが伝えたとおりの福音の希望に固く立つために、大いに役立って来ました。

### 2. ロマ

v.14 「神の霊によって導かれる者は皆、神の子なのです。」

使徒たちが語り、原始キリスト教が体験したような力強い聖霊の臨在感は、恐らくその時代独特のものでありました。しかし使徒後の教会は、使徒たちの体験ではなくて彼らが伝えた聖霊への信仰を、特にその典礼の中で表現しました。

私たちがミサごとに歌う栄光の賛歌は、「主のみ聖なり、主のみ王なり、主のみいと高し、イエス・キリストよ。聖霊と共に、父なる神の栄光のうちに。アーメン」と、聖霊を父と子への礼拝と結びつけています。公式祈願の結びが、「聖霊の交わりの中で、あなたと共に世々に生き、支配しておられる御子、わたしたちの主イエス・キリストによって。アーメン」となっているのも同様の理由によるものです。それは“祈りの法”(lex orandi)は“信仰の法”(lex credendi)と一致する……、すなわち教会の典礼は常に教会の信仰に基づいているからです(ミサ典礼書の総則 前文2 参照)。

私たちが洗礼の秘跡によって、私たちを「神の子とする霊を受けた」(v.15)のであれば、私たちは神の国の相続人、「しかもキリストと共同の相続人です」(v.17)。私たちは主日のミサをささげること、この使徒継承の信仰を共に宣言しているのです。

### 3. 申

v.34 「…… あえて一つの国民を他の国民の中から選び出し、御自身のものとされた神があったであろうか。」

父なる神は、御子キリストを立て、その血によって信じる者のために罪を償う供え物となさいました(ロマ3:25)。私たちはその血によって贖われ、罪を赦され(エフェ1:7)、天に蓄えられている、朽ちず、汚れず、しほまない財産を受け継ぐ者とされました(1ペト1:4)。私たちを愛して、私たちを神の子としてくださった神が他にあったでしょうか。

v.39 「あなたは、今日、上の天においても下の地においても主こそ神であり、ほかに神のいないことをわきまえ、心に留め、……」

“ミサを生きる”(長江神父/総則初版の序文)とは、そういうことであり、キリストの再臨の日まで、私たちキリスト者の生活のすべてはミサに結ばれ、ミサから流れ出、ミサに向かって秩序づけられて行くのです(ミサ典礼書の総則1参照)。共にミサをささげる現代の教会に、今朝も昇天のキリストが語りかけておられます、「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」と。

ハレルヤ、アーメン。

## 6月18日 キリストの聖体

出 24:3～8    ヘブ 9:11～15    マコ 14:12～26

### 1. マコ

v.22 「取りなさい。これはわたしの体である。」

v.24 「これは、多くの人のために流されるわたしの血、契約の血である。」

主イエスによる晩餐の制定の言葉は、共観福音書の各受難物語りの部分と 1コリ 11:23-26 にあって、それぞれの言い回しには多少の違いがありますが、それは初代教会のミサでこの言葉が実際に用いられた際の司牧上の配慮を反映したものとされます。

典礼憲章は、教会が受け継いで来たこの聖なる伝承を説明して、次のように述べています。

「我々の救い主は、渡されたその夜、最後の晩餐において、自分の体と血による聖体のいけにえを制定した。それは、十字架のいけにえを主の再臨まで世々に永続させ、しかも、愛する花嫁である教会に、自分の死と復活の記念を託するためであった。それは、いつくしみの秘跡、一致のしるし、愛のきずなであり、キリストが食され、心は恩恵に満たされ、未来の栄光の保証が我々に与えられる復活の祝宴である。」(47)

ミサ、特に主日のミサは、教会がキリストに血によって贖われた聖なる者たちの群であり、神の国を受け継ぐ民であることの象徴であって、伝統的に“ことばの典礼”と“感謝の典礼”の二つの部分から成っています。“ことばの典礼”では聖書に基づいて福音が宣教され、“感謝の典礼”ではその福音に従ってキリストの体の食卓がすべての信者のために用意されます。典礼憲章は、すべての信者がこの祭儀をよく理解し、これに意識的に、敬虔に、また行動的に参加して、自分自身を奉獻することを学ぶようにと教えています(48)。

### 2. 出

モーセに導かれてエジプトを脱出したイスラエルの民は、神の山ホレブで契約を与えられて神の民となりました。モーセが民に読み聞かせた元来の契約の書は十戒(出 20:1-17)であったと思われませんが、モーセは雄牛のいけにえの血を民に振りかけて言いました。「見よ、これは主がこれらの言葉に基づいてあなたたちと結ばれた契約の血である。」(v.8) イスラエルはここで、自らが神に贖い取られた民であることを承認し宣言したのであって、彼らは決して自らの力や行いを誇ってはなりません(申 7:6-8, 9:6)。

出 20:22-23:33 は、後にイスラエルがパレスチナに住むようになった時代の生活を反映していて、恐らくヨシュ 24:25 に記されている“シケムの契約における掟と法”であったろうと推測されるものです。イスラエルは一貫して、自らの存在の根拠を“神に贖い取られた民”であるという歴史的事実に求めました。ですからホレブでの契約は、時代が変わっても、彼らの現在と決して切り離せないものであり続けたのです。

典礼憲章で用いられ、そして特にミサの奉獻文の中で唱えられる“記念(アナムネーシス)”という言葉

を理解する鍵がここにあります。

### 3. ヘブ

v.14 「キリストの血は、わたしたちの良心を死んだ業から清めて、生ける神を礼拝するようにさせないでしょうか。」

私たち会衆は“感謝の典礼”の中で、司祭が“皆さん、このささげものを……”と奉納祈願に招くところで起立します。それは“このささげもの”が全会衆のものであり、御前に奉仕するように選ばれたことを感謝する祭司の民の供え物であるからです。

第二奉献文を例に挙げれば、“私たちは今、主イエスの死と復活の記念を行い、ここであなたに奉仕できることを感謝し、命のパンと救いの杯をささげます”となっています。同様に、第一奉献文では“私たち—奉仕者と聖なる民—も……ささげます”、第三第四奉献文では“私たちは今、……ささげます”、となっています。

本来、信者の献金を携えた奉仕者も、奉納行列に加わるのが望ましく、パンとぶどう酒の奉納から切り離されるべきではありません。主の洗礼の祝日の奉納祈願からも理解できるように“信者の霊的いけにえは、司祭の奉仕を通して唯一の仲介者キリストのいけにえと一つに結ばれて完成する”(ミサ典礼書の総則 前文5) からです。

「生ける神を礼拝する」とは、そういうことなのです。私たちの良心を死んだ業から清めてくださるのはキリストの贖いの血、罪の赦しの血であって、私たちが神に仕える祭司としてくださいました(黙 1:6, 5:10, 1ペト 2:9)。ですから私たち会衆は、自分のすべてを主にささげることが、起立して奉献に参加することによって宣言します。それは、奉納祈願から始まるというのが、カトリック教会の伝承なのです。

ハレルヤ、アーメン。

## 6月25日 年間第12主日

ヨブ 38:1,8~11    IIコリ 5:14~17    マコ 4:35~41

### 1. ヨブ

ヨブ記は、苦難の問題をいろいろな角度から論じた知恵文学の一つで、その思想の深さと共に芸術的価値において、古代オリエントの文学の中で抜きん出たものでありますが、その結末部分で神が語られる言葉が、今朝のテキストです。

v.1 「主は嵐の中からヨブに答えて仰せになった。」

しかしその答えは、ヨブを初めとする知者たちへの弁明や釈明ではなくて、逆に神からの問いでありました。お前は何者なのか。お前が創造者なのか。天地の創造者である神が、今現在その統治を威厳に満ちて行っておられることを知らないのか。

そして最後にヨブは答えます。「あなたは全能であり、御旨の成就を妨げることは出来ないと悟りました。…… それゆえ、わたしは塵と灰の上に伏し、自分を退け、悔い改めます。」(42:2,6)

### 2. マコ

イエスが突風を静めた奇跡の物語りは、マルコ福音書において際立って生き活きと描かれています。それは弟子たちの目撃証言をより素朴な形で伝えているからでありましょう。「先生、私たちが溺れてもかまわないのですか」(v.38)は、マタイとルカではもっと行儀の良い言葉に代えられています。

マルコ福音書が書かれた頃、ローマに住んでいるキリスト者たちは敵意を持った世界の中で、苦難の大波と嵐に悩まされていました。3世紀初め頃に活躍して、後に“ラテン神学の父”と呼ばれるに至ったテルトリアヌスの言及は、このマルコ福音書のテキストの伝統的解釈を伝えています。“この小さい舟は教会の姿を現す。教会は海、すなわち世にあって、波、すなわち迫害と誘惑によって乱されている。主は、いわば忍耐強く眠っておられるが、ついに聖徒たちの祈りによって起こされて世に対抗し、御自分の者たちの平安を取り戻される。”

世の終わりの日まで、いつも歴史の教会と共におられる方は、風や湖さえも従わせる方、天と地の一切の権能を授かっているイエス・キリストであることに、現代のキリスト者も固く信頼するようにと、この物語りは呼びかけているのです。福音書を通して使徒たちは、代々の教会が艱難や迫害の中にあっても、いつもその時代の地上的で世俗的な判断にあえて反抗して、共におられる復活のキリストに信頼することの大切さを証言し続けて来ました。「いったい、この方はどなただろう。風や湖さえも従うではないか」(v.41)という驚きが、現代の教会にとっての生き活きとした体験となることを祈り求めましょう。

教会の苦難は、外の世界の敵意や迫害によるものだけではなくて、むしろ教会自身が生けるキリストの支配を忘れて、自らの政治的社会的能力による世直しの仕事を第一の使命と考えることに起因しています。弟子たちは、眠っている主を起こして自分たちの対処法に協力させるのが、教会の歩み方ではないことを

この事件から学んだと主張しているのです。

### 3. II コリ

v.16 「それでわたしたちは、今後だれをも肉に従って知ろうとはしません。肉に従ってキリストを知っていたとしても、今はもうそのように知ろうとはしません。」

イエス・キリストを過去の人として尊び、その人格や教えに学んで、今度は私たちが現代社会の中で新しい活動を推し進めることによって、理想の世界を造るという考え方が、現代のキリスト教の中で大きな勢力になっています。左は革命的な方向性を持った社会派のキリスト教から、右は原理主義的な教派に至るまで、現代には現代の新しい神学、新しいイエス理解が必要だと声高に主張しています。

使徒たちが伝えた和解の福音(5:19)、罪の赦しと新しく生かされた者の福音(v.15, v.17)にそのまま歩むのではなくて、新しい現代的なイエス理解によってキリスト教を再解釈しようとする、圧倒的な数のキリスト教諸派が勢力を伸ばし続けているのです。

「肉に従って知る」とは、使徒たちが証言するケリュグマ(宣教)のキリストではなくて、各種の仮説に基づいて復元される新しいイエス像(史的イエス)を、これこそが“現代のイエス”であると考えて、新しいキリスト教を構築することです。そのような新しいキリスト教諸派が、互いに自らの勢力拡張に熱中して競い合っている事実を、天上のキリストは確かに見ておられるに違いありません。

v.15 「その目的は、生きている人たちが、もはや自分自身のために生きるのではなく、自分たちのために死んで復活してくださった方のために生きることなのです。」

“現代の善意と熱心”が作り出した“理想の世界像”を目指して進むことこそが、“キリストのために生きる”ことなのだという論理と、使徒たちが元来伝えたキリストの福音とは、明らかに別のものです。キリストは死んだ。キリストは過去の人物である。使徒たちも死んだ。使徒たちも過去の時代の人たちである。現代に生きる我々こそが、真にキリストの精神を現代に生かすキリスト者なのだという声が、保守的伝統的な教会を圧倒してしまったように見えます。

しかし聖書の学びは、生きておられる天上のキリストに、今も使徒継承によって聖伝と聖書を通して語り続けている使徒たちの声に、耳を傾けることです。どうか私たちの主イエス・キリストの神、栄光の源である御父が、私たちに知恵と啓示との霊を与えて、心の目を開いてくださいますように(エフェ1:17-18)。

ハレルヤ、アーメン。